

057	040	039	038	037	034	032	030	028	026	024	015	013	011
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

編集長独白

表紙の時計／カルティエ タンク ルイカルティエ サファイア スケルトン ウォッチ

Editor's Choice!

エルメス ドレサージュ ルウール・マスケ／ジャケ・ドロー グラン・セコンド カンティエーム アイボリーエナメル／ハリー・ウィンストン ミッドナイトムーン フェイズ オートマティック 42mm／グラスヒュette オリジナル パノマティック・インバース／カル F.ブヘラ マネロ トゥールビヨン リミテッドエディション／オメガ シーマスター 300 マスター コーアクシャル／ピアジェ ライムライト・ダイヤモンド ウォッチ／オーデマピゲ ジュール・オーデマ スモールセコンド／リシャール・ミル RM 07-01 レディース

世界は時計で回っている。

太陽と地球の関係を実感できる超複雑時計

グッチ インターロッキング ウォッチ
ジャパン リミテッドエディション
東北の人々に寄せるグッチの想い

ジラールペルゴ
コンスタント エスケープメント L.M.
新機軸が開いたジラールペルゴの次なる扉

アップロックス ウォッチ
トゥールビヨン ファーメント
オスミウムクリスタルの輝きに魅せられて

ボールウォッチ エンジニア マスター II
スライド クロノグラフ & マグネット
スポーツウォッチの実用性を高める独自の発想

ブルガリ オクトマゼティック クロノグラフ
& オクト オールブラック
ふたつのパートナーシップの記念モデル

ロレックス オイスターパーペチュアル ロレックス
ディープシー Bluegate タイアル
堅実なロレックスのもつひとつの魅力

ドゥグリスゴ
グレイジー スカル
意表をつくハイジュエリーウォッチの誕生

パテックフィリップ

途絶えることなき175年を祝って

2014年、パテックフィリップは創業175周年を迎え、10月半ば、ジュネーブ・プラレワットにある本社でその記念限定モデルを発表した。機械式時計の技術の粋を集めた超複雑時計「伝統的な手工芸の技法を駆使した、希少なハンドクラフトのタイムピースなど、175年の歴史の集大成ともいえる記念限定モデルをご紹介します。

ヴァシロン・コンスタント

12月初め、東京・銀座に日本で初めての直営ブティックをオープンしたヴァシロン・コンスタント。東京ブティック限定モデル、9月末に香港で開催されたウォッチズ&ワンダースで発表された新作など、ヴァシロン・コンスタントの「現在」を取り上げる。

066	ラファブリク・デュ・タンルイ・ヴィトン
071	ジュネーブで時計製造の基礎を固めたルイ・ヴィトン 日本に再び上陸するパルミジャーニ・フルリエ
082	時計ジャーナリスト 瀧澤 広の「マイ・チョイス」第16回 時計ジャーナリスト 瀧澤 広の「マイ・チョイス」第16回
085	ビクトリノックス・スイスアーミー・スイノックス 極限の環境に耐える最強の時計を求めて
086	ラドー ふたつのハイパークロム・モデル プラズマ加工とモノブロック構造にみるラドーの進化
090	カシオ・オシアナスOCWG1000
092	腕時計新着情報 バリエーションを加えたハイブリッド電波時計
104	ルードヴィヒ・エクスリン博士×山田五郎トークショー 誌上公開
110	ウブロ 日本スイス国交樹立150周年祝賀ガラディナー
111	ブルガリ ルチエラ
112	WC インヂュニア・クロノグラフ 特別モデル
113	クストス チャレンジダニペトロサGT
114	エドックス クラスワンクロノオフシヨアリミテッドエディション
115	ジャケ・ドロープティウルミニットル・シエフ&ル・ヴォートウール
116	ヴェネチア国際映画祭をサポートするジャガー・ルクルト
118	モンブラン エクストリームコレクション
120	エルメス エクリチュールコレクション
122~128	インフォメーション、メーカー&ショップリスト、次号予告

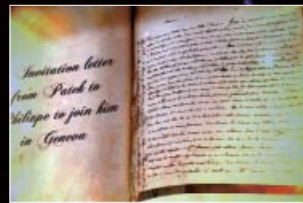
時計文化の未来への使者

一時期、日本市場で活動を休止していたパルミジャーニ・フルリエが日本法人を設立し、新たな展開を開始する。そこでムーブメントと装飾の両面で伝統を尊重し、継承するパルミジャーニ・フルリエの現況を主要モデルとともに探る。

途絶えることなき175年を祝って

祝祭

パテック
フィリップ



1845年 アントワーヌ・ノルベール・ド・パテックとジャン・アドリアン・フィリップが契約調印。1851年 パテック フィリップに社名を変更。



1839年ジュネーブでパテック
ク チャベック創業。

ヴァシュロン・コンスタンタン



ヴァシュロン・コンスタンタンは2015年、創業260周年を迎える。ジュネーブでも最古の時計ブランドとして、時に栄華を、時に衰退や変貌を経験しながらも、途絶えることなく260年を迎えることは称賛に値するだろう。日本との関係も長いが、2014年12月初め、日本初の直営ブティックが東京・銀座にオープンする。その記念モデルのほか、9月末に香港で開催されたウォッチズ&ワンダーズで発表された新作の一部の概要を見てみたい。

「トラディショナル・ハイジュエリー・メディアムモデル」。直径35mmの18Kホワイトゴールド・ケースと文字盤に計296個のバゲットカット・ダイヤモンドをセットしたハイジュエリー・ウォッチ。ムーブメントは手巻き、Cal.1400(20石。毎時2万8800振動。パワーリザーブ約40時間を搭載する)。ジュネーブ・シール取得。サファイアクリスタル・バック。3気圧防水。価格3704万4000円。

Photo/Takenori Aoki(WPP<P57~59>) Courtesy of Vacheron Constantin Text/Tomoko Kayama(WPP)

ラ・ファブリク・デュ・タンルイ・ヴィトン

ジュネーブで時計製造の基盤を固めたルイ・ヴィトン

スタンブルの発表とともに時計の分野に進出したルイ・ヴィトンがジュネーブ郊外メイランの地に時計工房を創設した。高級時計の中心地に設けられた新たな拠点が今後のルイ・ヴィトンの時計製造に飛躍をもたらすことは想像に難くない。



2014年10月7日に正式にオープンした「ラ・ファブリク・ドゥ・タンルイ・ヴィトン」。ジュネーブ州北部に位置するメイランに建設された約4000㎡の工房で、現在、約80名が働く。周囲にはショールームが工房を設けている。

オープニングでは(左から)ラ・ファブリク・デュ・タンルイ・ヴィトンのディレクター、ホセ・フェルナンデスさん、メイラン市長のモニック・ボジェットさん、ルイ・ヴィトンマルチエ ウォッチ&ファインジュエリー ヴァイス・プレジデントのハムディ・シャティさん、ジュネーブ国務院 セキュリティ・ポリス&エコノミー ヴァイス・プレジデントのピエール・モーデさん、ルイ・ヴィトンマルチエ ファイナンス ディレクターのエリック・ブラドンさんがテープカットを行った。



スイスの厳しい環境基準に基づいて3年の構想期間を経て、建てられた工房では約40名の時計師が時計の組み立てにあたっている。今後約10年をかけて、必要に応じて拡張していく予定だという。



2002年、ルイ・ヴィトンは初の腕時計「タンブル」を発表し、時計の世界にデビューを果たした。遠目にもそれとわかる特徴的なケース・デザインは、スタンブルは、その存在が広まるまでに多くの時間を要することはなかった。そしてスタンダード・モデルからクロノグラフやトゥールビヨンまでバリエーションを広げ、2011年にはミニトリビーターを発表するに至った。このミニトリビーターの開発のために白羽の矢が立ったのがファブリク・デュ・タンだった。そして彼らとのコラボレーションが飛躍への転機でもあった。2011年夏にはファブリク・デュ・タンを買収し、高級時計に本格的に乗り出すことを示した。そしてこのときジュネーブに工房を設けることが決定されたのだ。

こうして今年10月、ジュネーブ郊外メイランの新工房が稼働を開始した。2011年末に傘下においた文字盤工房レマン・カドランもこの工房に統合されている。

カラフルな文字盤に誘われる非日常



「エスカルワールドタイム」。自動巻き、Cal.LV106(直径37mm、厚さ6.65mm、26石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約38時間)を直径41mm、厚さ9.75mmの18Kホワイトゴールド・ケースに搭載。3気圧防水。価格723万6000円(変動価格)。

今年のルイ・ヴィトンの新作のなかでも話題作が「エスカルワールドタイム」だ。エスカルとは「ストップオーバー」を意味している。特徴はなんといっても、カラフルな文字盤にある。ふたつの都市名の中に描かれた幾何学模様には30色以上が使われ、ファブリク・デュ・タンルイ・ヴィトンの工房で職人が絵筆でアクリル系ペイントを使って1色ずつ模様を描き、1色ごとに100℃のオーブンで乾燥させ、完成までには50時間を要するという。見ているだけで旅が楽しくなるようなカラフルさは、ルイ・ヴィトンが行っているトランクのカスタマイゼーションに通じる。これはトランクのトリミングのカラー変更やアーム部分のコーティング、イニシヤルやビクトグラムのハンドペイントなどを顧客のオーダーに応じて行うものだ。

この時計のもうひとつの特徴は針を備えず、3枚のディスクで時刻を表示する点にある。リュウズを1段引いて、回転させ、基準とした都市名を12時位置に合わせ、その後、リュウズを2段引いて時分のディスクを回転させ、その都市の時刻を黄色の矢印に合わせる。こうして世界24都市の時刻が表示される。

新しいケースのフォルムもトランクから発想したもので、ルイ・ヴィトンのテーマである「旅」が巧みに表現された。

パルミジャーニ・フルリエ、
日本に再び登場

時計文化の 未来への使者

日本市場で一時、活動を休止していたパルミジャーニ・フルリエだが、新たにパルミジャーニ・フルリエ・ジャパンを創設し、本格的な展開を開始する。独立時計師の時計ブランドとして着実に歩む一方、サンド・ファミリー財団の下で製造の垂直統合も果たし、パーツ製造ではスイス時計業界のなかでなくてはならない存在となっている。しかし規模を拡大しても、時計文化の伝統の継承を使命とするミシエル・パルミジャーニさんの、機械式時計への愛情が変わらないことは、ユニークピースを見ると明らかだ。



「トリック テクニカ パルム」。ベゼルで作動させるミニット・リピーター、永久カレンダー、トゥールビヨン、クロノグラフ機構を備える手巻きムーブメントを18Kホワイトゴールド・ケースに搭載する。文字盤と裏蓋には手作業でパターンを彫り、エナメルを施している。針はブリカジュール・エナメル。ユニークピース。

自分が欲しいものを作ることが情熱の原点

1980年代、ユリス・ナルダンが発表した「アストロラビウム ガリレイ」は機械式時計復興に一石を投じた、歴史的傑作だ。その開発の立役者、ルードヴィッヒ・エクスリン博士が来日し、10月24日、山田五郎さんとトークショーを開催。その内容を再現する。



ルードヴィッヒ・エクスリン博士。1952年2月10日生まれ。スイスのパーセル大学で学んだ後、ベルン大学で修士号、博士号を取得。2001年から2014年2月末まではラ・ショール・ド・フォンの国際時計博物館の館長を務めた。



山田五郎。1958年東京生まれ。編集者・評論家。雑誌編集者を経て、現在、フリーランサーとして時計、ファッション、西洋美術、街などの幅広い分野で講演、執筆活動を行っている。テレビ、ラジオでも活躍する。

天才時計師を支えた 学問の素養

山田五郎(以下、**山田**) ●会場にお越しの皆さん、こんばんは。山田五郎です。そして、こちらにおいでになるのが、ルードヴィッヒ・エクスリン博士です。皆さんも、そのお名前はよく耳にされていることと思いますが、では、いったいどんな方なのか？ また、彼が「ユリス・ナルダン」で成し遂げてきたイノベーションとはどういうものなのか？ 今夜はそういうことをうかがっていきたく思います。博士と呼ばれることからおわかりのように、エクスリン氏は博士号をお持ちです。しかし、この学位は時計師としてお取りになったわけではないですよ？

エクスリン博士(以下、**LO**) ●皆さま、こんばんは。さて、博士号のお話しをする前に、学生時代のことについて少し触れておきたいと思います。私はスイスの

会場に展示された「トリロジー セット リミテッドエディション」。天文三部作は現在、「アストロラビウム・ガリレイ・ガリレイ」、「プラネタリウム・コペルニクス」、「テリリウム・ヨハネス・ケプラー」の3モデルをセットにして、3つのワインダーを装備する特製ボックスに入れて限定販売されている。写真はプラチナ製。価格6156万円。



「アストロラビウム ガリレイ」の3部作第一弾は、古代の天文観測機器を腕時計で再現。写真は2003年にリニューアルされた現行モデル。地球から見える太陽、月、星の位置や月齢、月食と日食の日時を表示する。自動巻きCal.UN-99。ケース径41mm。

アルネーゼという人が注文して作らせた超複雑な天文時計です。後にローマ法王に寄贈され、現在もバチカンが所有しています。いったい、どのような経緯で、18世紀に作られたこの天文時計の修復を任されることになったのですか？

LO ●ファルネーゼ・クロックは、ある人物によってバチカンで発見されました。ところが、発見されたはいけれど、説明書きもなければ、調査や分析もされたことがありませんでした。発見した人物も時計師ではなかったため、修復ができるだけでなく、この歴史的な時計がどのような構造になっているのか、機構はどうなのか、そういったことを調査・分析できる時計師を探そうではないか、という話になりました。その話が、回りまわって私の師匠であるシュプリーングの元までたどり着いたのです。私は師匠から「この作業を手伝う気はないか？」と聞かれました。私はそのような素晴らしいムーブメントに触れるチャンスなど、この先二度とないかもしれないと考え、お引き受けすることにしました。

山田 ●作業は非常に困難なものになったとうかがっていますが。

LO ●このような古い時計の修復を経験したことがない者にとって、それはとても難しい作業でした。ですが、素晴らしい時計に触れ、分解し、その研究まで

ベルン大学で哲学、考古学、ラテン語、古代ギリシャ語、古代史を学び、修士号の学位を取りました。時計の勉強を始めたのはその後になりますが、時計師の修行を始めてからも、それと並行して、数学や物理学、技術・科学史などの勉強をいたしておりました。

山田 ●そのように、そもそもは学問の世界にいた方なんですが、一方で、スイスの小都市ルツェルンで時計師をしていたヨルグ・シュプリーングさんという方に弟子入りもされています。

LO ●修士号を取った後なので、1976年から77年になりますか。ヨルグ・シュプリーングという時計師の元で修行を始めた。修行は1983年に、私が時計師の資格試験に合格したのを機に終わりますが、この間もずっと大学の勉強は続けておりました。そして、まさにこの時期、縁あって、ファルネーゼ・クロックの調査・分析を任せられるということになりました。博士号は、この調査・分

ける。私は大学で考古学を学びましたが、考古学の見地から見ても価値のある仕事です。言ってみれば、バルテノン神殿を最初に発掘した考古学者と同じような、とても栄誉な仕事だと思えました。

山田 ●作業には4年間を費やしたとか。

LO ●ムーブメントの分解自体は5カ月で終わりました。さらに、すべてのパーツを調査し、再び組み立てて保存する、という作業までは順調で、さほど時間はかかりませんでした。時間がかかったのはその後、調査結果を文書にまとめるのに多くの時間を費やさなければなりません。文書には全パーツの説明や構造の図面などを収録しました。それだけでなく、この時計をより深く理解するためのガイドとなるように、多くの解釈を加えました。1979年に執筆作業を始め、文書にまとめ、書物として発表できたのが1983年です。執筆作業が一番多く時間を割いたことになります。

ユリス・ナルダンとの出会い

山田 ●ファルネーゼ・クロックの修復作業を通じて、エクスリン博士はじつにたくさんのお話を学びます。その学びの成果のひとつが、師匠のシュプリーングさんと共に製作された天文振り子時計です。ちょうどその頃、ロルフ・W・シュニーターさんという方が、衰退しかけていた

析をベースにして技術・科学史で取得いたしました。

山田 ●なぜ学問だけでなく、時計作りを実践しようと考えたのですか？

LO ●じつはラテン語の成績があまりよくありませんでした(笑)。ともあれ、これからの人生、なんらかの方法でお金を稼がなければならぬ。そう考えたときに、頭に浮かんだのが時計師でした。もともと細かな手作業が好きだったので、彫金師か時計師になりたいとは思っていましたが、幸運なことにヨルグ・シュプリーングという素晴らしい時計師との出会いがあり、時計師の道に進むことを決めたのです。

ファルネーゼ・クロックとの邂逅

山田 ●そして、先ほどお話しに出たファルネーゼ・クロックとの出会いがあったわけですね。ファルネーゼ・クロックは、1725年にパルマ公妃のドロテア・フ

「ユリス・ナルダン」を買収して、その再興を図ろうとされていた。そんなとき、エクスリン博士とシュプリーングさんが製作した天文振り子時計を、シュニーターさんが偶然目にされた。ここにエクスリン博士と「ユリス・ナルダン」との出会いが生まれたわけですね。

LO ●ロルフ・W・シュニーター氏との出会いは、師匠のシュプリーングを介して生まれました。当時、シュニーター氏は「ユリス・ナルダン」を買い取ったばかりでした。そして、かつての名声を取り戻すために、なにか特殊な機構を備えた、特別なムーブメントが製作できる時計師をスイス中で探していました。そのさなか、ルツェルンでたまたま私たちのアストロラビウム付き振り子時計を目にしたのです。シュニーター氏はこの機構を小型化すれば、腕時計にできるのではないかと着想を得て、師匠のシュプリーングの元を訪ねました。シュプリーングは「エクスリンなら、それができるかもしれない」と、私をシュニーター氏に推荐してくれたのです。私と「ユリス・ナルダン」との出会いは、このような経緯から生まれたのです。

山田 ●そして、1985年に新生ユリス・ナルダンの第一弾モデルとして誕生したのが、「アストロラビウム ガリレイ」が「アストロラビウム ガリレイ」だったわけですね。アストロラビ